

桑原文庫に見る桑原羊次郎の 刀装具研究

島根大学企画部図書情報課企画・整備グループ

佐藤陽子

一 始めに¹

松江市出身の桑原羊次郎（号「双蛙^{そうあ}」慶応四・明治元（二八六八）年生、一九五五（昭和三〇）年没）は、刀装具や肉筆浮世絵等の研究者、コレクターとして知られるほか、郷土史家、社会事業家、政治家の顔も持つ多才な人物である。

羊次郎は松江藩の御用商人を務めた桑屋太助本家の次男（戸籍上は三男）として生まれ、中央大学の前身校・英吉利法律学校を卒業し、家督を継いだ。これにより羊次郎は松江に一時帰郷することになったが、羊次郎前半生の活動は故郷のみにとどまらなかった。結婚後ミシガン大学で法学修士号を取得し、帰国後は鴻池銀行等に勤

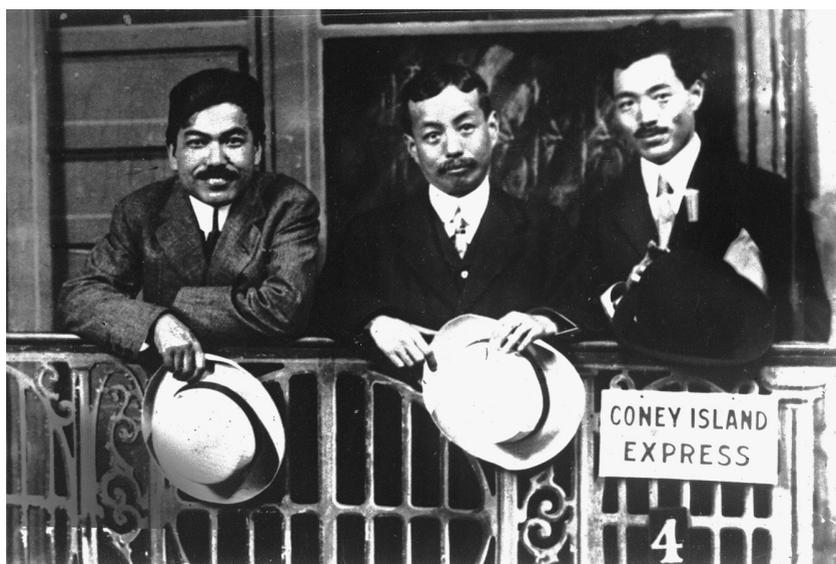


図1 1912（明治45）年ニューヨークで撮影された写真²
左から堀市郎（松江市出身の写真家）、桑原羊次郎、野口英世

務、一九一〇（明治四三）年の日英博覧会では美術部委員を務め、一九一三（大正二）年まで欧米に滞在して各地の美術館や欧米人のコレクター等のもとを訪問した。後半生では主に松江に居住し、ラフカディオ・ハーンの顕彰を行い、財団法人私立松江盲啞学校の校長となる等、さまざまな文化・社会事業に着手したほか、衆議院議員（二期）も務めた。これらの業績により、没後、松江市名誉市民の称号を贈られている。

羊次郎の活動範囲は、地域社会から海外、実業界から学術界までとさまざまに広がっており、その成果は、羊次郎の旧蔵品からなる桑原文庫（島根大学附属図書館）でうかがうことができる。桑原文庫の中心となる資料は、一九五九（昭和三四）年に桑原家から購入され、その後同家より二〇一三（平成二五）年と二〇一五（平成二七）年の二度寄贈を受けた⁴。これには刀装具、日本刀、武器に関連した資料が数多く含まれており、それらは、羊次郎による刀装具研究の手法等を読み取ることができるところで重要なものである。

近年、羊次郎の活動が注目されつつある。二〇一八（平成三〇）年には生誕一五〇年を記念し、四月に島根県立

古代出雲歴史博物館、九月に島根県立美術館で小企画展が行われた。島根県立美術館の展示と連動する形で、当館でも「生誕一五〇年 桑原羊次郎と桑原文庫」展を開催した。これらの展示により、美術史家・桑原羊次郎の全体像が明らかになり始めたところである。

本稿では、二〇一八（平成三〇）年に島根大学附属図書館で開催した桑原文庫に関する企画展および資料受入作業を通じて得られた知見のうち、特に桑原羊次郎の刀装具研究について整理したい。

二 羊次郎の刀装具研究

日本刀の外装となる柄つかや鞘かばに付属する目貫めぬき、鏢つば、筭こうがい、小柄等の金属等で作られる品を刀装具と呼ぶ。

刀装具研究は、羊次郎の研究活動の中で大きな位置を占めると同時に、没後も高く評価された^{5,6}。羊次郎は、鏢つばよりも、目貫めぬき、筭こうがい、小柄等に関する論考を中心に残している。

羊次郎が刀装具を見知ったのは実は海外でのことだった。羊次郎はジャポニスムが流行していた時期のアメリカに留学した際、現地ですべての刀装具の収集が行われてい

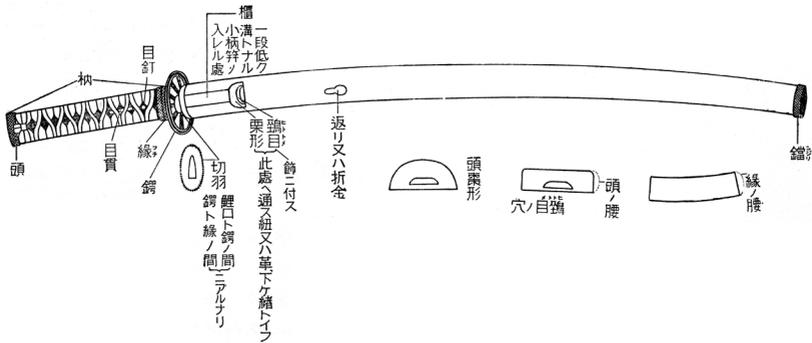


図2 打刀拵⁸

ることに気付き、一八九三〜一八九四年に帰松していた折に刀装具を購入した。羊次郎は関連書を読んで刀装具の作り手である金工師の経歴を調べたものの、真贋についてはつかみきれず、最終的に安来市出身の彫刻家・米原雲海らの紹介で金工師・加納夏雄に刀装具の鑑定を依頼した。その後羊次郎は加納と親交を深め、一八九六(明治二九)年以降は本格的に刀装具鑑定の

手ほどきを受けるようになる。こうした羊次郎の熱意の裏には、海外で日本の刀装具が人気を博しているのに対し、同時代の日本では忘れ去られていたことへの思いもあったようである。^{9,10}

羊次郎は犬養毅らが発起人となった中央刀剣会で審査員となり、その研究成果を『刀剣会誌』『日本美術』に寄稿する等、刀装具研究者としての道を歩んでいった。¹¹ 羊次郎の著作は現代でも刀装具に関する基本書として扱われることがあるほか、市場に羊次郎の箱書きがある刀装具が出た場合は、その旨が特筆される場合もある。¹²

このように現代の刀装具研究や鑑定にも影響が残る羊次郎だが、加納からの教え以外に、刀装具に関する知見をどのように得て、どのように研究を進めていったのか。羊次郎の刀装具研究の代表作『日本装剣金工史』には、「真正なる鑑定家」のあるべき態度が述べられている。

元来鑑定の事たる、書画と謂わず、能くその真擬を弁し正否を論ずるは、易に似て甚だ易ならず、寧ろ難中の大難事と云うべしである。真正なる鑑定家は、其大部分は之を天質に帰すべく、百卷の鑑定書

を読み、懇切なる先輩の指導により、数多の実物を歴覧し、能く其手癖を見覚え、年代系統流派を察し、比較対照して始めて能く真鑑を得べきものである。¹³

すなわち刀装具の鑑定において、文献から知見を得ること、先達の指導を受けること、実際に刀装具を確認することを羊次郎が重視していることが分かる。

羊次郎はここに己が理想とする刀装具研究家としての姿を示しているのではないだろうか。以下、桑原文庫の収蔵資料に基づき、書物の収集、指導者等との人脈、刀装具の実見手段の点で羊次郎の研究手法を概観したい。

三 書物の収集

羊次郎は様々な方法で刀装具研究の検討材料となる資料を得ている。ある時は寺の過去帳や墓碑銘を確認し、ある時は家々に残された文書や図書館の蔵書を用いた。¹⁴一方、手元にも刀装具研究に使用したと思われる図書を残している。桑原文庫は、羊次郎旧蔵の図書、著作の原稿、知人からの書簡等で構成されており、図書としては、江戸時代から昭和期に書かれた武具、刀、刀装具やその作

り手である金工師に関する書物八〇点以上があるほか、現在受入作業中のもののなかにも刀装具関係資料が数多く含まれている。例えば、羊次郎が最初に入手した刀装具関係の資料は『鑿工譜略』と『装剣奇賞』であると思われるが、同題の図書は桑原文庫に残されている。¹⁵

また、受入作業済みの資料には、部分的に來歴が判明したものがある。江戸時代に発行された刀剣・武具関係史料の多くは、故実家である伊勢貞丈・享保二（一七一七）年生、天明四（一七八四）年没）の著作を書写したものである。伊勢貞丈は女官の装束から元服の儀式にいたるまで幅広い物事について執筆しており、刀剣や武具関係の書物も見られる。これらの資料は、伊勢家から松江藩士・望月家へ直接伝授された資料であり、望月家旧蔵書であったが、後に桑原文庫に収められた。^{16, 17, 18}

その他、羊次郎が金工師・海野勝珉所蔵の希少な刀装具関係書を書写して私家版を作成していたことや、こうして集めた資料を読み比べて情報を精査していたことが桑原文庫所蔵の写本への書入れ、羊次郎の著作、羊次郎没後に書かれた知人の回顧談等から読み取れる。^{19, 20}

四 指導者等との人脈 — 書簡集「独楽集」より —

先に述べたように、羊次郎は加納夏雄の指導を受けながら研究を始めた。加納は優れた金工師であり、帝室技芸員や東京藝術大学の前身校・東京美術学校の教授を務めていた。羊次郎の著作には加納に言及した箇所が多数あるほか、東京美術学校構内に建てられた加納の銅像台座に弟子の一人として自分の名が列記されたことを「光荣」としている。羊次郎が加納に刀装具鑑定を学んだのは四〜五年間という短い期間ではあるが、加納の知見に負うところが大きく、深く敬愛していたことが見て取れる。²¹

加納の没後、羊次郎は中央刀剣会の審査員や東京金工協会学芸賛助員等を務め、刀装具愛好家や金工師と広く交流した。²² 加納亡き後、彫金技術の知見については、加納の弟子である海野勝珉から教えを受けていたが、羊次郎はそれだけに依存することはなかったようだ。²³ 刀装具の需要先は、江戸期では大名家と裕福な町人、明治以降は財界人が主であった。²⁴ 羊次郎が属した中央刀剣会は、当時の政界・財界の著名人が多く名を連ねており、「刀

剣会発起ノ趣旨」によると発起人として坊城俊章や松平頼平のような公家・武家の出身者、岩崎弥之助のような財界人の名があり、一九四一（昭和一六）年時点の名簿でも山内豊景などの華族等が所属していることが確認できる。²⁵²⁶ 中央刀剣会には、刀装具を実見したりその知見を交換したりするのに適した人脈があったことは想像に難くない。国内の金工師や同好の士から届いた手紙の一部は、羊次郎が「独楽集」と名付けた全一一巻の書簡集に収められている。これらの手紙から、羊次郎がそうした人々と連絡を取り合って情報を交換していた様子が分かる。²⁷

羊次郎の交友は日本国内にとどまらなかった。羊次郎の著作や未刊行の原稿からは、欧米の愛好者との交流から様々な刺激を得ていることが見て取れる。これについては「桑原羊次郎とその美術工芸研究」（村角紀子著）に詳しい。²⁸

五 刀装具の実見手段 — 蔵書への書入れより —

羊次郎は刀装具の収集を行っており、羊次郎の著作に加納旧蔵の刀装具や知人の所持品を譲り受けたこと、競

売に参加したこと等が記されている。²⁹それを裏付けるように、「独楽集」には刀装具の受取書や互いの収集品交換の申し出についての書簡が収められているほか、桑原文庫に売立帳が残されている。³⁰

また、羊次郎は名家が所蔵する刀装具の実見も行っているが、その記録が意外なところに残されている場合がある。所蔵する図書への書入れである。これは「桑原羊次郎と桑原文庫」展の準備において筆者が確認したものである。書入れのあった『金工鑑定秘訣』（全二巻）は、文政二（一八一九）年に発行された木版本である。この巻之一見返しには、羊次郎と思しき筆跡で次の書入れがある。

明治三十一年九月廿二日松平家ニ於テ拝見セシ後藤彫物ニ付キ 見^{一字抹消}タル事柄本書ニ朱書ヲ以テ記入ス 凡テ此等ノ品ハ造ハ折紙ノ添フル珍品ナリ 朱書ハ本書ノ記事ト実物ノ異ナル点ヲ主トシテ記入セシモノナリ
拝見目録
金紋俱利伽羅籠三処揃 裏哺金

祐乗作 乗真作 徳乗作 栄乗作 顕乗作 即乗作
程乗作 廉乗作 壽乗作 延乗作
金紋這籠三処揃 裏哺金
祐乗作 宗乗作 乘真作 光乗作 即乗作 廉乗作
通乗作³¹

この記述より、羊次郎が、一八九八（明治三一）年九月に室町後期から続く著名な金工師一門である後藤家の刀装具を松平家で実見する機会を得ていることが分かる。^{32,33}なお、三処揃（または三所物）とは、筭、小柄、目貫の三種を同一の金工師の作でそろえたものであり、裏哺金とは刀装具等で用いられる技法の一つである。すなわち、羊次郎が目にしたのは、金を施された俱利伽羅龍や這った態勢の龍の図案で統一された筭、小柄、目貫が一式となった刀装具であると思われる。祐乗等とあるのは後藤家の金工師名であり、松平家には書入れに挙げられた金工師ごとの三処揃がそろっていたのであろう。この「拝見」の結果、羊次郎は現物と資料の記述とが異なることに気づいたものと思われる。同本の巻之二には羊次郎がまとめた後藤家の金工師ごとの彫の特徴の書

入れがあり、他資料にも同様のものがある。³⁴書入れから、羊次郎が実見した刀装具をもとに金工師の作品の特徴をとらえ、現物と書物上の記述の違いを記入していることが分かる。

羊次郎はなぜこのような作業を行わなければならなかったのか。後藤家による刀装具の鑑定書について、羊次郎は『日本装剣金工史』で次のように述べている。

古鑑定書を研究する際に、上代の作物には、何時も夢想の鑽の大事あり、口伝とありて、此夢想の鑽とは何んであるか久しき間一向訳がわからず、先輩はもちろん後藤家元に就き質したが嘗つて之を知るものがなく、鑑定書中の暗礁であったが、八九年前実物比較研究よりして始めて之を了解し得たものである。是等の事は、予が多年苦しんで発見せし事柄ゆえ、是非後の研究者に残して其の労を省きたしと思ふ。³⁵

すなわち、後藤家による刀装具の鑑定書には本文に明記されない箇所があるために、羊次郎は実態を知るのに

難渋したのである。しかし書入れに残されたような刀装具の実見を通じて羊次郎は口伝等にあたる知識をつきとめ、その内容を『日本装剣装剣金工史』等の著作に記したのだ。

『金工鑑定秘訣』の書入れで言及されている「拝見」の出来事は、一八九八（明治三一）年二月に加納夏雄が亡くなってから、一九〇〇（明治三三）年八月に中央刀剣会が発足するまでの時期に相当する。師を失い、研究の助けとなる会もない中で、羊次郎は意欲的に研究を続けていたのである。

六 終わりに

以上見て来たように、羊次郎は「百卷の鑑定書を読み、懇切なる先輩の指導により、数多の実物を歴覧」（『日本装剣金工史』）することを自らの研究方法として実践していたと言えるのではないか。

これらの研究の蓄積を以て、羊次郎は、一九〇四（明治三七）年に『装剣金工談』、一九〇九（明治四二）年に『彫金家年表』、一九二二（大正一一）年に『古今装剣金工一覽』等を世に送り出し、刀装具の鑑定に必要な金工師

名や刀装具にまつわる知見をまとめた。一九四一（昭和
一六）年には研究の集大成とも言える『日本装剣金工史』
を発表し、没後、「装剣具研究では日本一」との評価を
得ることになる。³⁶

なお、羊次郎の研究方法が確定したのはいつからか、
羊次郎の刀装具研究が肉筆浮世絵等の研究の知見や政
治・社会活動のなかで得た人脈の影響をどの程度受けて
いるのか等検討すべき点が多い。今後の課題としたい。

付記

資料利用については鳥根大学附属図書館、月照寺（松江
市）の多大なご協力を得た。また、調査や本稿執筆中は、
鳥根大学法文学部の小林准士様、松江市史料編纂課専門調
査員の村角紀子様にご貴重なご助言を賜った。皆さ
まに深く感謝の意を申し上げる。なお、本稿は、二〇一九
年度法文学部山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴
史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」（代表・
野本瑠美）による研究成果の一部である。

参考文献と註

1 本稿は、二〇一八（平成三〇）年九月に鳥根大学附属図
書館で開催した「生誕一五〇年 桑原羊次郎と桑原文庫」

展解説パネル「桑原羊次郎と刀装具」（筆者担当分）を大
幅に加筆修正したものである。

2 桑原文庫収蔵品。

3 桑原羊次郎・相見香雨研究会編『桑原羊次郎―郷土のエ
ンサイクロペディア』松江市歴史まちづくり部史料編纂課、
二〇一八年（松江市ふるさと文庫二一）、一―八頁、五〇―
五二頁。

4 前掲3 四八―四九頁。

5 若槻虎眠、太田直行、佐々木浩、四方文吉、藤野民次郎、
皆美興蔵、木幡吹月、岡田秀勝「桑原双蛙先生追悼録」『日
本美術工芸』一九五五年（二〇六号）五一―六一頁。

6 「座談会 桑原双蛙翁を偲ぶ」『山陰新報』一九五五年
一〇月二八日付、四面。

7 南明日香『国境を越えた日本美術史―ジャポニスムか
らジャポロジ―への交流誌一八八〇―一九二〇』藤原書
店、二〇一五年、三九頁によると、当時、ジャポニスム
は欧米を席捲していた。羊次郎の留学先のアメリカでは、
一八七〇―八〇年代にかけ、新興財閥が世界中の美術品を
購入し、自宅を飾るようになっていた。

8 『日本刀講座』雄山閣、一九三四年（第八卷）「用語解説（三）
部」三頁。

9 桑原羊次郎『増補装剣金工談』津久井書店、一九三〇年、
二〇〇―二〇二頁。

10 桑原羊次郎『日本装剣金工史』荻原星文館、一九四一年、

- 四九七頁。
- 11 中央刀剣会の発起人については、「刀剣会発起ノ趣旨」『中央刀剣会』<http://chuo-toukenkai.org/history>（参照二〇二〇年三月四日）、羊次郎の寄稿先については、前掲 9 二〇一―二〇六頁。
- 12 たとえば、小笠原信夫『鐔』保育社、一九七五年（カラーブックス三三〇）「三」頁で羊次郎の著作は「鐔を研究するための主な参考図書」として挙げられている。また、市場で言及される例は、「小柄 銘 如竹（花押）」『刀和』二〇一九年（三七四号）日本刀柴田、一三一―一四頁。
- 13 前掲10 一頁。旧字体を新字体に改めて引用。
- 14 過去帳や墓碑銘の例としては前掲9 八四頁、家々の文書の利用については前掲9 一四七頁、図書館の利用については前掲9 八〇頁。
- 15 前掲10 同頁。
- 16 「伊勢貞丈」市古貞次ほか編『国書人名辞典』岩波書店、一九九三年、一六―一七頁。
- 17 現在、桑原文庫に所蔵されている伊勢貞丈による著作が望月家旧蔵書であることについては、小林准士氏（島根大文学部）の調査・御教示による。たとえば、現在桑原文庫にある『刀剣問答』やその附図『刀剣圖』は、伊勢家が所蔵していた資料を望月家五代・望月圓次が書き写したものである。
- 18 島根県立図書館郷土資料編集『松江藩列士録（第六巻）』島根県立図書館、二〇〇六年、四一―四二頁によると、望月家は、松江藩主松平家の初代・松平直政以来の藩士である。初代望月角右衛門は三〇石取・五人扶持であったが、その後加増されており、例えば五代・望月圓次は二五〇石となっている。
- 19 前掲5 同頁。
- 20 前掲10 一八一―一九頁、四九四頁。
- 21 前掲10 四九四―四九八頁。
- 22 前掲3 一九―二〇頁、五〇―五二頁。
- 23 前掲10 五〇四―五〇六頁。
- 24 内藤直子「監修・著」、吉原弘道「もっと知りたい刀剣・名刀・刀装具・刀剣書」東京美術、二〇一八年、七二―七五頁。
- 25 「中央刀剣会名簿」『工学と工業』一九四一年（九巻四号）一七七―四二―一八六―五〇頁。
- 26 「刀剣会発起ノ趣旨」『中央刀剣会』<http://chuo-toukenkai.org/history>（参照二〇二〇年三月四日）
- 27 たとえば、後藤丈太郎（一九〇五（明治三八）―一九〇六（明治三九）年頃受信。島根大学附属図書館蔵桑原文庫「独楽集」第六巻所載）、本阿弥光賀（一九三〇（昭和五）年受信。同第六巻所載）から送られた書簡より、羊次郎が刀装具に関する調査のために各所に問い合わせを行っていたことや、逆に地元金工師についての問い合わせを受けていることが分かる。

- 28 村角紀子「桑原羊次郎とその美術工芸研究―附『欧米美術行脚』目次翻刻」『松江市史研究』二〇一八年（九号）、松江市歴史叢書一一）五三頁。
- 29 前掲10 二二五頁、四九八頁。
- 30 刀装具の受取書は、竹中公鑒（一九〇一（明治三四）年受信。島根大学附属図書館蔵桑原文庫「独楽集」第六卷所載）からの書簡に見える。収集品の交換については、山上八郎（一九三二（昭和七）年受信。同第一〇卷所載）に見える。
- 31 野田敬明「編」、高瀬伴寛、野田政明「画」『金工鑑定秘訣』北島長四郎「出版者」、一八二〇年（卷之一）全三七「丁」（島根大学附属図書館蔵桑原文庫）より翻刻。改行等は実資料に即していない。
- 32 「後藤祐乘」『日本大百科全書（ニッポニカ）』JapanKnowledge. <https://japanknowledge.com>（参照：二〇二〇年一月二八日）
- 33 筆者は『金工鑑定秘訣』の書入れて言及されている松平家について、旧松江藩主家の当主松平直亮家のことと仮定する。後続の「月照寺蔵「御腰物御小道具帳」翻刻（部分）」参照のこと。
- 34 島根大学附属図書館蔵桑原文庫の「後藤秘傳目貫彫物目利切り抜き」、「後藤彫物口傳内證紀」、「御代々大判御書判御折紙書判御折紙裏印」には羊次郎のものとおぼしき書入れがある。また、同文庫の「後藤銘鑑」は今村長賀から送られた書物だが、本来余白であったと思しき箇所には双蛙追
- 加と書入れのある刀装具の押形が収められており、羊次郎が実見の記録を残そうとした跡が見える。
- 35 前掲10 一八一―一九頁。旧字体を新字体に改めて引用。
- 36 前掲6